

ひたちなか 球文だより 31



吹上遺跡の糞石（ふんせき） 「佐藤次男考古学資料」には、吹上遺跡の糞石が含まれていました。縄文時代の中期初頭「五領ヶ台式」の貝層中から出土したものです。残存する長さは 55mm、太さは最大で 22mm、重さは 11.2g。何であるのかを伝えずに観察してもらいました。しばらくして答えがわかったみたいですが、それを言葉にするのには抵抗があるようです。糞石を研究していた千浦美智子さんの分類では「シボリ」という部位に相当します。

(2009.8.1)

CONTENTS

1ケース・ミュージアム 11・13 佐藤次男考古学資料 I・II (旧石器・縄文・弥生時代)

「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」第3回 石岡史蹟保存会の人々 (川崎純徳)

これからの「ふるさと考古学 ~遺跡と人のワークショップ~」 (さかいひろこ)

1ケース・ミュージアム 12 ひたちなか市出土の大刀・遺跡めぐり 埼玉県さきたま古墳群探訪

調査報告補遺 富士ノ上Ⅱ遺跡出土の炭化種実 一市内における炭化種実出土様相との比較一 (佐々木義則)

第5回企画展 三反田鯛塚貝塚人骨のクリーニング 2 ひたちなか市の遺跡④ 那珂湊中学区編 1

歴史の小窓③ 「機の道は1本しかねえだ」 虎塚古墳花便り③ チゴユリ ほか

ワンケース・ミュージアム 11・13



佐藤次男氏遺影
(佐藤綾子氏提供)

さとう つぎお 佐藤 次男 考古等 資料 I・II (旧石器・縄文・弥生時代)

I 2009年2月21日(土)～5月9日(土)

II 2009年7月18日(土)～9月19日(土)



遺品の展示 左の写真に見える学生カバンの中には採集したまま洗っていない土器の破片が入っていました。竹べらに付着した土には貝殻の粉が混じることから貝塚の調査に使用したものと考えられます。これらは、遺物を包んでいた新聞紙の上に展示してみました。表札に刻まれた「佐藤陵石」は佐藤次男氏のペンネームです。右の写真には、手書きによる「考古学会創立の趣意書」、『考古学』誌が並びます。

二〇〇八(平成二〇)年度に佐藤次男氏の御遺族より、佐藤氏が生前に蒐集された遺物を一括してセンターに寄贈いただきました。搬入された箱を開けてみると、土器や石器などとともに、調査に使用した道具や研究に関する遺品も出てきました。これらの資料については、佐藤氏が主宰していた機関誌『考古学』に因み、遺品も含めて三五三五点を「佐藤次男考古学資料」と呼びました。研究領域の広さを反映して遺物も多岐にわたりことから、時代別に分けて紹介するための展示を企画しました。ワンケース・ミュージアムとしての「佐藤次男考古学資料」です。全体では四回の構成、そのI・IIとして旧石器・縄文・弥生時代の研究に関する遺物と遺品を展示了しました。

佐藤次男氏について

展示の冒頭にも掲げた佐

藤氏の略歴を紹介しておきます。

一九三一(昭和六)年茨城県那珂郡湊町(現ひたちなか市)生まれ。旧制水戸中学校卒業。学生時代より考古学に興味を持つ。卒業後に「考古学会」を主宰して機関誌『考古学』に調査研究を発表するなど、戦後の茨城県における考古学研究の先駆者一人。一九六五(昭和四〇)年より一九八七(昭和六二)年まで茨城県史編纂室勤務、一九八九(平成元)年まで茨城県立歴史館史料部長。茨城県考古学協会顧問、茨城民俗学会常務理事、茨城県郷土文化研究会会长などを務める。県内の市町村市編纂も数多く手懸けた。二〇〇七(平成十九)年没。

佐藤次男考古学資料について

二〇〇八(平成

旧石器時代

『考古学』第一五号(一九五四年発行)には日立市の「笛目発見石器」の図が掲載され、次のような記述が残されています。「泥板岩製であるが、極めて硬質である。Scraperと呼ぶべきものであろう。土器伴出の有無その他出土状態が不明なので時期は知ることが出来ない」。「土器伴出の有無」を特記していることからは、旧石器時代の石器ではないかと考えていたことが窺えます。これは、群馬県岩宿遺跡の調査により日本に旧石器時代の存在が確認されて五年後のことでした。現在、「笛目発見石器」の一部は日立市郷土博物館に展示されており、旧石器と考えて間違いない資料です。「同類と思はれるものに、那珂湊市山之上(南)発見のもの」という記述が続くことから、佐藤氏自身が旧石器を採集していたことが考えられます。

「佐藤次男考古学資料」には、貞岩製のナイフ形石器が含まれていましたが、注記が無いために出土地が明らかでありません。

縄文時代

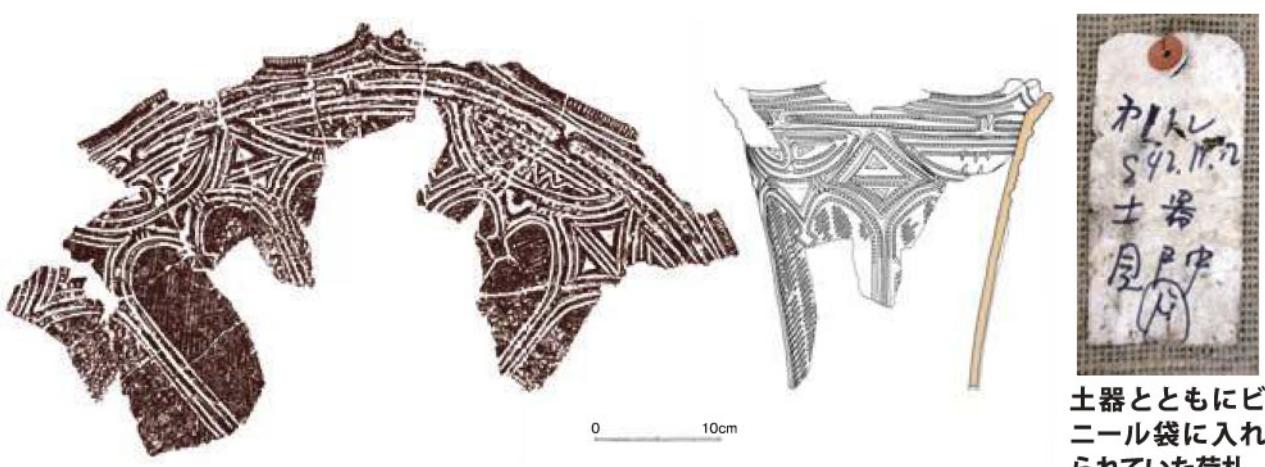
佐藤氏が考古学に魅せられたきっかけの遺跡が、縄文時代の大洗町吹上遺跡でした。中学二年生の時に、部龜之助氏が収集した石器を見て、実際に遺跡を訪れます。「じゃあ、この人が拾ったところへ行ってみようと思って、行ったのが吹上遺跡というところです。ここは戦後ですかね、もうとにかく石器がごろごろしている。特に石錐が多かったです」。佐藤氏は一九四六(昭和二二)年から吹上遺跡を調査し、翌年には高校の史学会の活動としても発掘を行いました。その成果

は『史窓』第一号(一九四八年発行)、『茨城考古学』

第一号(一九六八年発行)に発表されています。「吹上貝塚も何地点がありまして、上層下層があるんです。下層から五領ヶ台式相当のが出るし、上から称名寺式が出てくるんです」という、上層の「称名寺式」は既に報告されていましたが、下層の「五領ヶ台式」については未報告のままでした。「佐藤次男考古学資料」には、一九六七(昭和四二)年一一月一一・一二二日に発掘された資料が未整理の状態で梱包されていました。土が付着したままであつた土器を水洗し接合してみると、器形と文様構成の復元ができる「五領ヶ台式」の深鉢形土器が検出されていました。土が付着したままであつた土器を水洗し接合してみると、器形と文様構成の復元ができる「五領ヶ台式」の深鉢形土器が検出されていました。また、土器の破片に混じって糞石が採取されていました(表紙の写真)。

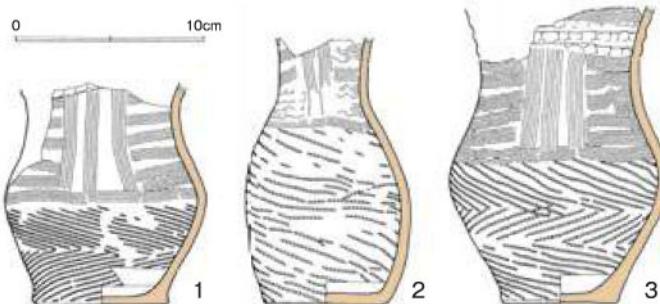
弥生時代

佐藤氏は、高校を卒業すると日本専売公社に入社しました。高校の史学会での活動の熱が冷めやらず、一九五一(昭和二五)年に磯崎正彦氏、西野文男氏とともに「考古学会」を設立し、機関誌『考古学』を発行するようになります。「目的として挙げた一つは、弥生時代の研究。当時この辺の弥生時代についてはほとんど空白なんです。編年というものは戦後の主流ですから、これをなんとか組上げていきたいというのがあつたし、空白をもう少し明らかにしていこうと」。会設立の当初は、弥生式土器と古墳時代の土師器の区別も難しく、まずは資料の収集が急務でした。『考古学』誌上に遺跡の地名表を作成することも、土器を分類して弥生式土器編年の基礎を発表して行きます。



土器とともにビニール袋に入れられた荷札

吹上遺跡の五領ヶ台式土器 吹上遺跡において佐藤次男氏が発掘した「五領ヶ台式」の深鉢形土器です。「第1トレント」の「貝層中」及び「下層」として取り上げられていた破片が接合しました。残存高は250mm、口径は推定で266mmほど。口縁部は、4単位で突起が付き波状を呈します。胎土にはキラキラと輝く金雲母が多量に含まれています。



十王台式土器 1の器内面には「神敷台」、2の底面には「八幡上」と、墨書による出土地の注記がありました。3は富士ノ上遺跡の発掘調査で出土したものと考えられます。これら3つの遺跡はいずれも、佐藤次男氏の自宅近くにありました。



高校在学の一九四九（昭和二四）年には佐藤氏を中心として市内の富士ノ上遺跡の発掘が行われていました。「佐藤次男考古学資料」には、当時の調査風景の写真も含まれており、この調査と思われる土器の出土状況の写真も見られます。「八幡上」「神敷台」と注記された土器とともに、出土状況の写真から富士ノ上遺跡と考えられる土器、これら三点の「十王台式」が、器形の復元できる弥生式土器の全てでした。ほとんどは耕作地に落ちていたと思われる小さな破片です。自ら歩いて採集した破片こそが、『考古学』当時の佐藤氏が弥生時代を研究する資料であつたと考えられます。

*青太字は佐藤次男氏の著作からの引用です。
（鈴木素行）

一九五二（昭和二七）年に市内の「馬渡」（現在の前原遺跡）から採集した特徴的な磨消繩文の土器を、弥生時代の古い時期の土器として分類していました。「既に、部田野の猪道跡を藤本さんが掘つてゐるんですよね。そういう情報は後でわかるんですけど。それで弥生の古手の方に「猪式」っていう情報が入つてくんですよ。だけど、どこの「猪」を言つてんだろうっていうわけで」と当時が回顧されており、同じ地域で研究が競合した藤本弥城氏の手持ちの資料がわからないもどかしさもあったようです。佐藤氏は「馬渡」という分類を後に藤本氏の「猪式」に変更しますが、「東中根」の土器については、藤本氏の「東中根式」ではなく、「洞山式」と呼ぶことを提案したりしています。

この言葉は、よい織物を完成させるには、一つ一つの工程を丁寧にこなしていくしかないと、という意味がこめられた、西会津のおばあさんの言葉です。写真の遺物は、奈良時代の紡錘車（ぼうすいしゃ）です。大麻もしくは苧（からむし）の纖維をつないだ（「うむ」といいます）ものに、回転をかけて撚りをかける道具を「紡錘（つむ）」といいますが、その紡錘のはずみ車を、考古学では紡錘車と呼んでいます。長い間使われて、ところどころに欠けがみられるこの紡錘を使っていた女性は、夜なべ仕事もしながら、丁寧に糸撚り作業を続けたことでしょう。この紡錘車が出土した武田西塙遺跡九号住居跡は火事にあっており、床面からはこの紡錘車と共に、炭になつた糸の塊も出土しています。出土した糸は、この紡錘車で撚りをかけてつくられた糸だった可能性があります。この糸はどこで布に織られる予定だったのでしょうか？私が最も知りたいことです。

（佐々木義則）

歴史の小窓 その三

「機の道は一本しかねえだ」



参考文献 『ハタの辺』 昭和村からむし織後継者
育成事業実行委員会、一〇〇四

ワンケース・ミュージアム 12・遺跡めぐり

遺跡めぐりは、「埼玉県さきたま古墳群探訪」と題して、二〇〇九年五月一五日に実施しました。当日は天候もよく、参加者二八名と添乗員二名で、埼玉県行田市にあるさきたま古墳群と、国宝の鉄剣が展示してある埼玉県立さきたま史跡の博物館を見学しました。これらの場所は、二〇〇八年一二月に、北関東自動車道が東北自動車道と直結したことにより、遺跡めぐりの見学が可能となりました。鉄剣は稻荷山古墳から出土したもので、一九七八年の保存処理作業中に一一五文字の銘文が発見され、一大ブームをもたらしたものです。また、さきたま古墳群は、たくさんの古墳群が密集している景色を一望出来るように整備されているため、それを見た参加者から感嘆の声が聞かれました。

この展示では、遺跡めぐりの参考展示として、市内の古墳と横穴墓から出土した大刀を公開しました。公開した大刀は一三振りですが、市内では一三の古墳群と十五郎穴横穴墓群から二五振りの大刀が出土しています。古墳や横穴墓から出土する大刀には、金銅製のものや、金・銀などで装飾が施されたものが多いことから、武器としての役割以外に、権力の大きさを表す道具としての性格が強かつたことがうかがわれます。市内で注目されるものには、笠谷古墳群第六号墳出土の金銅装圭頭大刀の柄頭や、虎塚古墳出土の銀装の小刀、十五郎穴横穴墓群第三二号墓出土の銅装方頭大刀があります。十五郎穴横穴墓群出土の大刀は、奈良県の正倉院に納められている大刀に酷似しています。



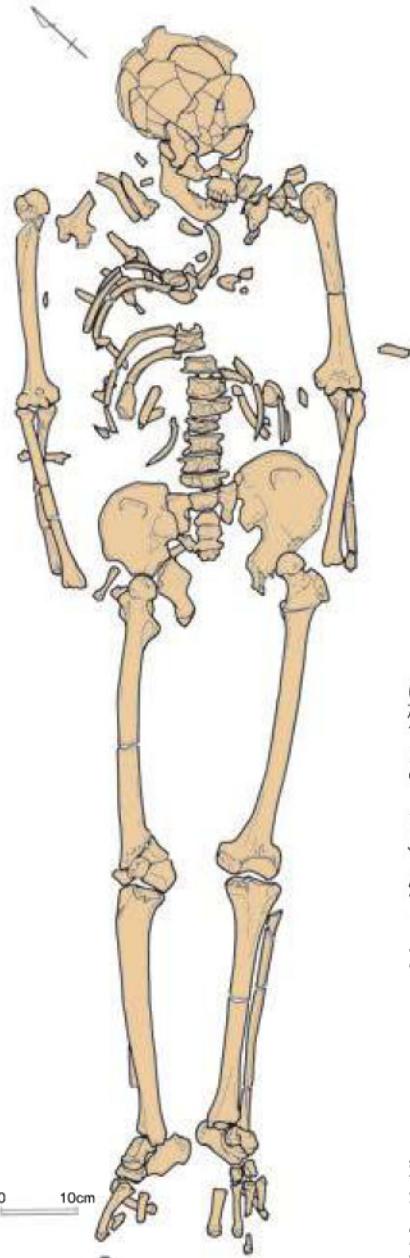
大刀が出土した市内の古墳群と横穴墓群の分布



鉄剣が出土した稻荷山古墳の前にて



国宝の鉄剣を見学する参加者



発掘当時の状況

第五回企画展では、昨年に引き続き三反田覗塚で検出・保存処理された人骨のクリーニング作業を行いました。クリーニングしたのは、一九八一（昭和五十六）年度調査の第一号人骨です。作業展示のほか、昨年クリーニングした人骨を含む二体の頭骨を展示し、虫歯の様子を紹介しました。

歯について 歯は二四本が検出されました。左下第一小白歯と右下第二大白歯は、生前に抜け落ちたと思われます。四本の親知らずについては、生前に抜けたか元々生えていなかつたようです。昨年同様この人骨も虫歯がありました。また、歯の咬耗がかなり進んでおり、咬合面のエナメル質は殆どありませんでした。
（菊池順子）

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
第三回企画展
**三反田覗塚貝塚
人骨のクリーニング2**

特別潜れ貝塚場にて作業場を設置し、立派な施設にて埋蔵人骨とともにクリーニング作業を実施いたしました。

平成21年
日程 5/15(水)～8/16(日)
時間 朝9時～午後4時(入館は午後4時30分まで)
料金 一般 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
TEL 029-279-8311

頭を北東に向け「仰臥伸展葬」という状態で埋葬されていました。発掘当時の所見は、三〇歳ぐらいの男性人骨であり、身長は一六〇センチメートルほどと報告されています。

検出した骨

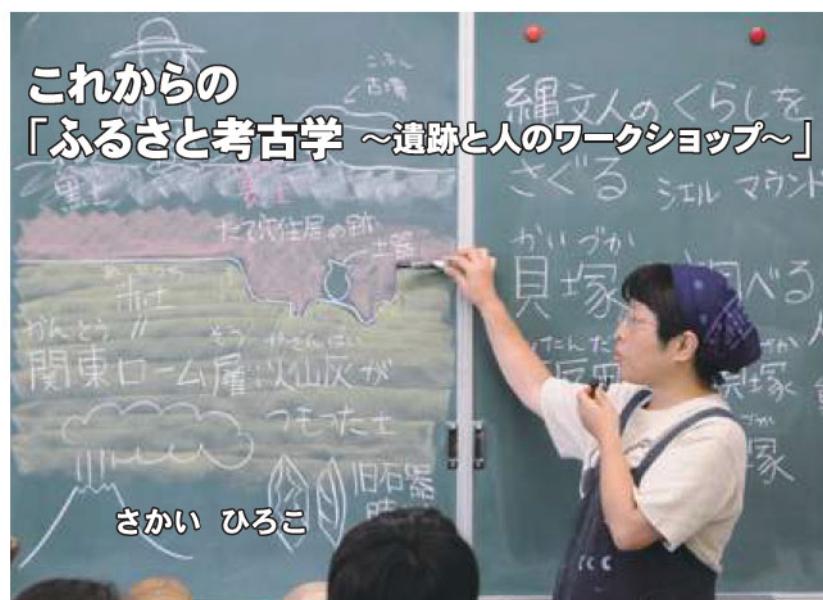
頭蓋骨・下頸骨・上腕骨・橈骨・尺骨・大腿骨・脛骨・腓骨・足首の骨・中足骨・寛骨・頸椎・腰椎・仙骨などは比較的良好に残存していました。肩甲骨は左右共に一部のみ、鎖骨は右側のみ検出できました。肋骨は一部が検出されるのみで、右側がより多く残存していました。手首から先の骨は、右中手骨の一部のみが残存していました。

第五回企画展では、昨年に引き続き三反田覗塚で検出・保存処理された人骨のクリーニング作業を行いました。クリーニングしたのは、



センター内土足厳禁

(2009.6.17 外野小学校 3年生社会科見学)



「アケビ、苦いけどあまりい！」昼休み、子どもたちが埋蔵文化財調査センターのまわりを駆け回っている。四年目を迎えた「ふるさと考古学（遺跡と人のワークショップ）」（略して「ふる考」）での一コマだ。

埋文センターのある虎塚古墳周辺は、杉林に囲まれている。去年の籠づくりの講座では材料のツルもそこで採取できた。時には石斧で木を切つたりもして、もう自分の庭のようになっている。

このからの「ふる考」を考える時、やつてみたいことは「縄文キャンプ」と「田んぼ」、「縄文カレンダーづくり」。まだ「ふる考」ではお泊まり会をしていない。でもそろそろ挑戦してもいいんじゃないかな？ キャンプでは、極力なにもしない。ぱちぱちとはざるたき火をじ一つと見つめていたり、星空をながめながら友だちとおしゃべり。そう、カマドや炉で調理するつてことが仕事かな。阿字ヶ浦の海岸でやつてもいいなあ。「田んぼ」はかなりきついと思うけど、遺跡のことを考えるとき、古代の暮らしを体験するのって必要なことなんじゃないか…と思う。「縄文カレンダーグリ」は、センターのまわりの身近な自然の様子の観察記録。いつどんぐりが実をつけたかとか、どんなトンボが飛んでいたとか、渡り鳥が飛んでいたとか。けつこうそういう視線が欠けている。すぐにはできないかもしれないけれど、いつかできたらいいなあ。

「遺跡と人のワークショップ」と名づけたのは、

考古学者だけじゃなくて、ふだんは遺跡とは関係のない人がこの講座でつながってほしいという願いをこめて。子どもたちには自分の手でものをつくりだす喜びを感じてもらいたいと思った。

だんだん感じてきたことは、考古学ワーク

しではなりたたない。ボランティアに参加してよかつた！ と感じられるような楽しい講座にしていただきたいな。

教科書から「縄文時代」が消えた現在だからこそ、足元の歴史を物語る発掘調査の成果を還元していく、さまざまな取り組みが必要なんだと思う。そうしなければ、埋文センターは消えてしまうかもしれない。ちょっとそんな危機も感じながら、「考古学って楽しいよ！」を伝えていきたいなと思う。



「土器の考古学3」で焼き上がった土器を持って（2009.8.22）

中学校区編①)



の円墳です。半分山遺跡の古墳時代の地形を削り、居跡から出土した子持勾玉です。表面には、三角形やはしご状の文様が見られます。



は、江戸時代に建築された土蔵を利用した資料には、塩づくりの遺跡の沢田遺跡の遺物や、近の資料があります。

前9時～午後5時
曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始
料
29-262-4650

約800年前

平安時代

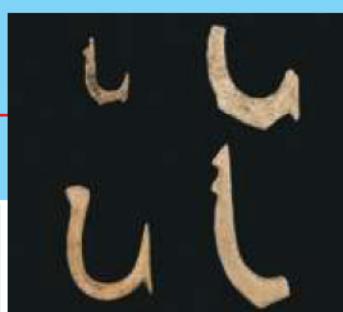
0

1km

H
川子塚古墳 酒列磯前神社



船窪遺跡群は、台地上の船窪遺跡・半分山遺跡・ぽんぼり山遺跡と、低地の猪谷津遺跡の4つの遺跡からなる遺跡群です。発掘調査によって、船窪遺跡と半分山遺跡で弥生時代後期から平安時代の集落跡が、ぽんぼり山遺跡で弥生時代後期と奈良・平安時代の集落跡及び古墳が確認されました。また、猪谷津遺跡では埋没した谷が見つかりました。そこから出土した板材からは、弥生時代の人々の木を加工する技術の一端を知ることが出来ました。



縄文時代の貝塚は大田房貝塚、これに重複する弥生時代の遺跡は柳沢遺跡と呼ばれています。縄文時代は、晚期の貝塚から釣針などの骨角器が出土し、注口土器が完全な状態のまま残されていました。弥生時代は、中期の集落跡が想定されます。管玉が副葬された土器棺墓も検出されました。

那珂湊中学区には、現在、77の遺跡がみつかっています。今回紹介する那珂川河口の地域の那珂湊第一小・第二小学区には、42の遺跡があります。この中には、縄文時代の小川貝塚や大田房貝塚、弥生時代の半分山遺跡、古墳時代の寺前前方後円墳やぼんぼり山古墳、古代の船窪遺跡といった各時代の遺跡が存在しています。

遺跡の発掘調査は、市内でもっとも古い1930年代から行われており、2008年までに33回実施されています。1936年～1939年にかけて調査が実施された小川貝塚では、縄文時代の早・前期の土器や石器、動物の骨等を材料としてつくられた骨角器が出土しています。大規模な調査として、那珂湊中学校の東側に位置する船窪遺跡群があります。1997年～2001年の5年間の調査で、弥生時代から平安時代にかけての住居跡が155基確認されています。

2008年までに発掘調査された住居跡の数
一小地区：17基　二小地区：167基
合計：184基



2008年までに発掘調査された遺跡（地図上の●印）

一小地区：御所内Ⅱ遺跡、前方遺跡、道理山遺跡、道理山貝塚、柳沢十二所遺跡、
大田房貝塚、小川貝塚、辰ノ口貝塚、御船藏貝塚、八幡ノ上遺跡
二小地区：船窪遺跡、ぼんぼり山遺跡、貉谷津遺跡、半分山遺跡、富士ノ上Ⅰ遺跡、
富士ノ上Ⅱ遺跡、富士ノ上貝塚、東塚原遺跡、東塚原古墳群

約 12000 年前

旧石器時代

縄文時代

約 2200 年前

弥生時代

約 1800 年前

古墳時代

約 1300 年前

奈良時代



ふるさと懐古館
館です。展示品
世の反射炉関係
・開館時間：午前
・休館日：月曜日
・入館料：無
・電話：02

昭和三七年から五年間、県立石岡一高に勤務した。当面は考古学は忘れて校務に専念するつもりであつたが、石岡一高の分校には西宮一男先生がおられ、本校には舟塚古墳の地主の山内先生や勅使塚古墳の関係者の一人でもあつた狩谷先生などがおられ考古談義に事欠くことはなかつた。

石岡一高に赴任して間もなく地元の石岡史蹟保存会のことを知つた。さそられるままに毎月の例会に参加した。例会は史跡探訪のあと酒席があり、史跡探訪の感想などを話しあつた。史跡探訪は石岡市内だけでなく千代田、玉里、八郷、出島、新治の各地の古墳や城館跡、貝塚などを見てまわつた。会の中心には今泉義文、笛目蔵之助、手塚邦彦さんらがいた。こうした活動の中で出島の服部保さんや玉造の堤乙音さん、新治村の酒井栄さんとも知り合い、それぞれの地域の貝塚踏査などを行つた。そこから調査に発展したものもある。

最初に調査したのは出島の志戸崎横穴墓であり、服部さんと実施した。生涯記念すべき調査第一号であり、今でも良く思い出す。服部さんは出島の古墳や貝塚を見て歩いた。玉里の田木谷遺跡や八幡脇貝塚の調査も史蹟保存会からのすすめであつた。田木谷は盗掘がひどく、八幡脇には道路が通るということで調査を要望されたのである。調査費はゼロということで顧問をしていていた石岡一高社会部が実施した。

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第3回 石岡史蹟保存会の人々



1962(昭和37)年 志戸崎横穴墓の調査



川崎 純徳

石岡一高での五年間は、こうした面々とのつきあいであつた。授業が終つて職員室にもどると来客があることを告げられる。応接室に行くと保存会の面々や時には新聞記者が待ちうけていた。「玉里で木舟塚古墳が破壊されて人骨が出ている」とか「八郷町では須恵窯が発見された」「土浦の木田余では石棺が出た」などの話しが持ち込まれ、現地踏査を求められ一緒に出かけたことも多かつた。

石岡でのもう一つの大きな出来事は石岡史蹟保存会を中心として「陣屋門保存運動」が展開されたことであつた。市側から様々な解決案が示されたようである。その一つが陣屋門の移設保存であつた。これに保存会は移設そのものの反対姿勢を崩さなかつた。「移設したら史跡の意味はなくなる。本来の位置にあることが重要なのだ」と主張していた。史跡は市民の魂という主張には、郷土の誇りとして来た史跡にそれほど大きな意味があることとはじめて知ることとなつた。陣屋門は結局、移設され、史蹟保存会の活動も事実上終りをとげた。

陣屋門運動に学びながら私は陸平貝塚、花輪台貝塚、富士見塚古墳などの保存運動にかかわつた。史跡はそこに住む人の心の寄りどころであるという石岡史蹟保存会の主張に共鳴し、今日、遺跡を考えていく上で根本的な理念となつてゐる。

富士ノ上Ⅱ遺跡出土の炭化種実

—市内における炭化種実出土様相との比較—

佐々木 義則



富士ノ上Ⅱ遺跡の調査風景

古代の竪穴住居跡の炉や竈に残る灰混じりの土を洗ってみると、そのなかから炭になった穀物や様々な果実の種が出土します。2008年に調査された富士ノ上Ⅱ遺跡からも奈良時代の炭化種実が出土しましたが、これまで知られていた市内出土の炭化種実の様相とは異なり、8世紀後半にも各種の雑穀栽培が一定量行われていた可能性を示すという興味深い結果を得ることができました。



図1 富士ノ上Ⅱ遺跡の位置

那珂湊第二小学校地内に所在する富士ノ上Ⅱ遺跡は、那珂湊市街地から北方に入り込む猪谷津と呼ばれる谷沿いに立地する。発掘調査は二〇〇八年の冬、財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社により実施され、五基の住居跡が調査された。報告する炭化種実は、奈良時代の一基の住居跡の竈内灰層から出土した。

出土した炭化種実はパリノ・サーヴェイ株式会社により種実同定が実施されたが未報告であったため、ここに概要を紹介するとともに、市内で実施された過去の同定結果を整理し、富士ノ上Ⅱ遺跡出土炭化種実の特徴を窺つてみたい。

出土した炭化種実はパリノ・サーヴェイ株式会社により種実同定が実施されたが未報告であったため、ここに概要を紹介するとともに、市内で実施された過去の同定結果を整理し、富士ノ上Ⅱ遺跡出土炭化種実の特徴を窺つてみたい。

1はじめに

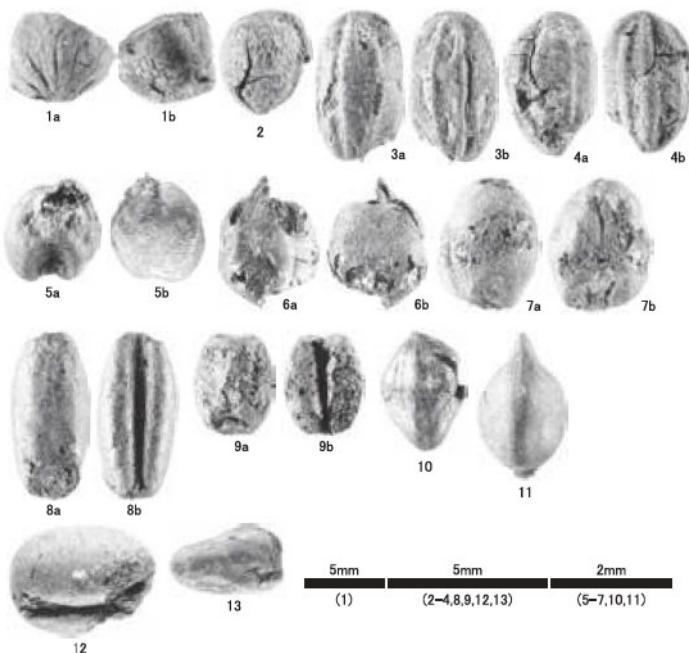
2富士ノ上Ⅱ遺跡の炭化種実

同定の結果、一五三八個の種実が検出される。木本のスマモ、サンショウウ属、草本のイネ、アワ近似種、アワーヒエ、アワーヒエーキビ、ヒエーキビ、オオムギ、ムギ類、コムギ、イネ科カヤツリグサ科、タデ属、マメ類、種類・部位不明五個が確認された(図2-表1を参照)。なお、栽培植物のほかにも落葉広葉樹のサンショウウ属、草本のイネ科、カヤツリグサ科、タデ属が確認された。いずれも伐採地や崩壊地や林縁などの明るく開けた場所に生育するという。このように栽培植物以外の種実についても、集落景観復原には役立つため、今後は食料以外の種実についても同定を進めていくべきである。

3ひたちなか市から出土した炭化種実の時期別様相

炭化種実は、古代の食を明らかにする貴重な資料であるにもかかわらず、茨城県における調査はあまり進んでおらず、県内ではひたちなか市出土炭化種実がデータの大部を占めている。市内においては武田遺跡群および船窪遺跡群の調査により、多くの同定データが蓄積してきた。そこでデータを整理、グラフ化し、弥生時代後期から平安時代にかけての変化について簡単に述べてみたい。

さて、弥生時代後期は、船窪遺跡群のデータによれば、イネを出土する住居跡数が圧倒的に多い。これ以後イネは平安時代に至るまで、船窪・武田



1. スモモ核 2. サンショウ属核 3. イネ穎・胚乳 4. イネ胚乳 5. アワ近似種穎・胚乳
6. ヒエ・キビ穎・胚乳 7. アワ・ヒエ・キビ胚乳 8. オオムギ胚乳 9. コムギ胚乳
10. カヤツリグサ科果実 11. タデ属果実 12. マメ類種子 13. マメ類種子
(4は第2号住居跡内灰層出土、他は第1号住居跡内灰層出土)

写真1 富士ノ上II遺跡出土炭化種実（パリノ・サーヴェイ 2008より引用）

古墳時代後期から奈良時代前半にかけての時期が気候の寒冷期にあたり、奈良時代後半から平安時代後半にかけての時期は温暖期であったと述べる「北川一九九五」。古墳時代における涼しく乾燥した気候が、コムギ生産が目立つ理由であるのかもしれない。なおコムギは粒食には適さず粉食を主としたと考えられ、イネ・アワ・キビ・オオムギ等の粒食を中心とした穀物とは調理法の上で大きな違いがあつたものと思われる。当該期のコムギ利用は、食事内容の上で特徴ある様相を呈していた可能

性がある。

古墳時代に入ると、コムギの出土が目立つようになり、またコナラ属あるいはブナ科と同定された「ドングリ」も出土する。市内でコムギの出土が目立つ時期は、古墳時代中期から奈良時代前半にかけてである。北川浩之氏は屋久杉の分析から、

古墳時代に入ると、コムギの出土が目立つようになり、またコナラ属あるいはブナ科と同定された「ドングリ」も出土する。市内でコムギの出土が目立つ時期は、古墳時代中期から奈良時代前半にかけてである。北川浩之氏は屋久杉の分析から、

古墳時代後期から奈良時代前半にかけての時期が気候の寒冷期にあたり、奈良時代後半から平安時代後半にかけての時期は温暖期であったと述べる「北川一九九五」。古墳時代における涼しく乾燥した気候が、コムギ生産が目立つ理由であるのかもしれない。なおコムギは粒食には適さず粉食を主としたと考えられ、イネ・アワ・キビ・オオムギ等の粒食を中心とした穀物とは調理法の上で大きな違いがあつたものと思われる。当該期のコムギ利用は、食事内容の上で特徴ある様相を呈していた可能

性がある。

古墳時代においてコナラ属のドングリが出土した点も後の時代にはみられない点である。カシ類・ナラ類といったコナラ属のドングリは、あく抜きを必要とするため食料とするには手間がかかり、平野部の遺跡である武田遺跡群において常食された可能性は低いように思える。武田遺跡群において火事にあつた住居跡から出土した炭化材樹種は、古墳時代前期から後期にかけてはコナラ・クヌギ主体であり、平安時代（九～一〇世紀）はクリ主体であった。こうした炭化材の樹種が集

落周辺の植生を反映したものとみれば、古墳時代における燃料材の利用も、コナラ・クヌギが主となることが想像できる。コナラ属のドングリが小枝に付いたまま燃料材として用いられた結果、炭化種実として検出されたものとみるべきである。

古墳時代においてコナラ属のドングリが出土した点も後の時代にはみられない点である。カシ類・ナラ類といったコナラ属のドングリは、あく抜きを必要とするため食料とするには手間がかかり、平野部の遺跡である武田遺跡群において常食された可能性は低いように思える。武田遺跡群において火事にあつた住居跡から出土した炭化材樹種は、古墳時代前期から後期にかけてはコナラ・クヌギ主体であり、平安時代（九～一〇世紀）はクリ主体であった。こうした炭化材の樹種が集

落周辺の植生を反映したものとみれば、古墳時代における燃料材の利用も、コナラ・クヌギが主となることが想像できる。コナラ属のドングリが小枝に付いたまま燃料材として用いられた結果、炭化種実として検出されたものとみるべきである。

古墳時代においてコナラ属のドングリが出土した点も後の時代にはみられない点である。カシ類・ナラ類といったコナラ属のドングリは、あく抜きを必要とするため食料とするには手間がかかり、平野部の遺跡である武田遺跡群において常食された可能性は低いように思える。武田遺跡群において火事にあつた住居跡から出土した炭化材樹種は、古墳時代前期から後期にかけてはコナラ・クヌギ主体であり、平安時代（九～一〇世紀）はクリ主体であった。こうした炭化材の樹種が集

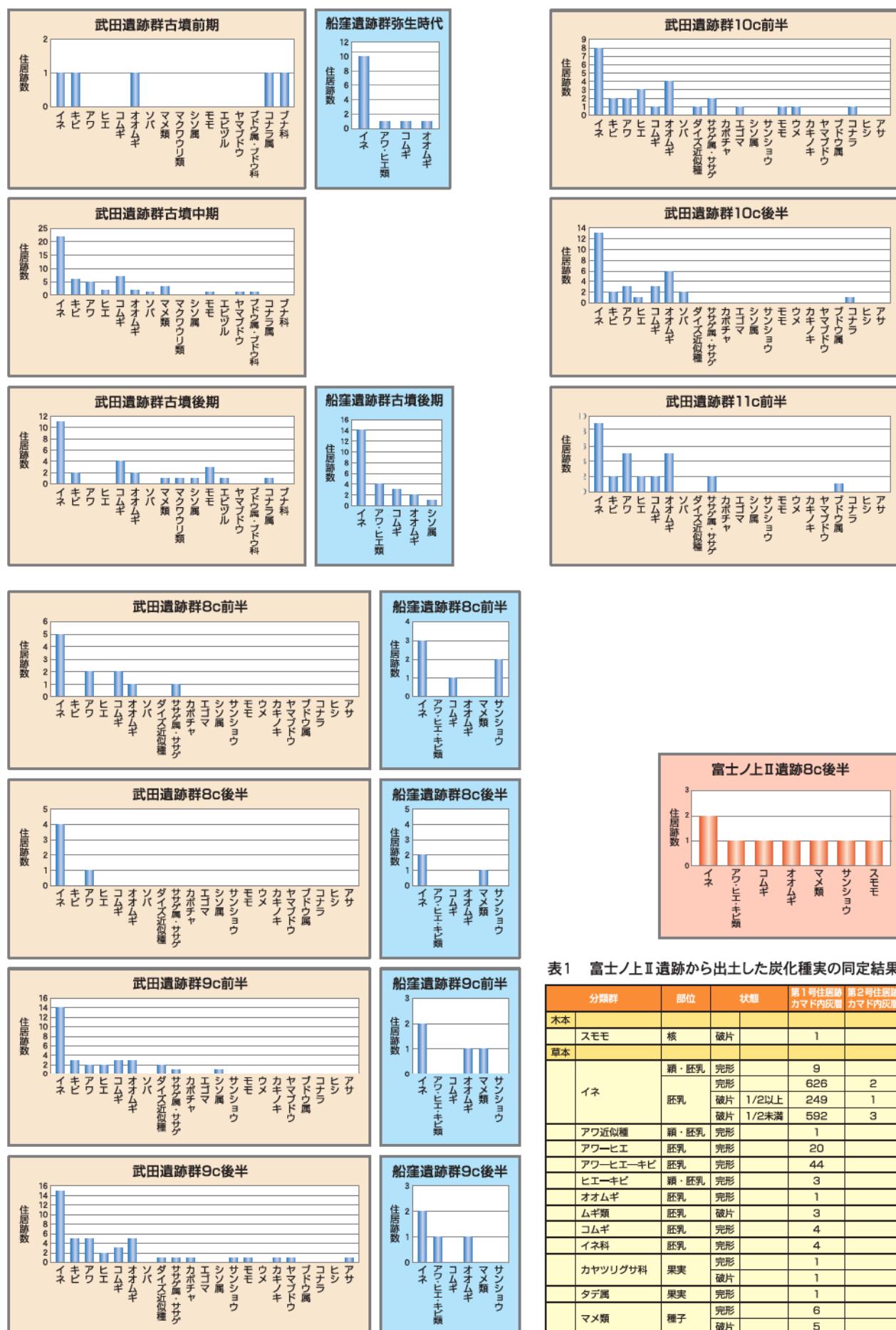


図2 ひたちなか市における炭化種実の時期別出土状況 (各遺跡報告書および [パリノ・サーヴェイ 2008] より作成)

表1 富士ノ上II遺跡から出土した炭化種実の同定結果

分類群	部位	状態	第1号住居跡 カマド内灰層	第2号住居跡 カマド内灰層
木本				
スモモ	核	破片	1	
草本				
イネ	穎・胚乳	完形	9	
	胚乳	完形	626	2
	破片	1/2以上	249	1
	破片	1/2未満	592	3
アワ近似種	穎・胚乳	完形	1	
アワヒエ	胚乳	完形	20	
アワヒエ-キビ	胚乳	完形	44	
ヒエ-キビ	穎・胚乳	完形	3	
オオムギ	胚乳	完形	1	
ムギ類	胚乳	破片	3	
コムギ	胚乳	完形	4	
イネ科	胚乳	完形	4	
カヤツリグサ科	果実	完形	1	
	破片	1		
タデ属	果実	完形	1	
マメ類	種子	完形	6	
	破片	5		

分が不足して生育不良になる。そのために異なる作物を順に栽培する輪作という栽培方法が採られるが、「輪作」にマメ科の植物を入れることによつて、窒素を補給し肥料を少なくすることができます「郷田一九九九」。このほか富士ノ上II遺跡からはスモモが出土しており、こうした季節の果物も当時の人々は楽しんでいたことがわかる。

さて、九世紀前半頃から目立つようになるオムギ・コムギ・キビ・アワ・ヒエといった雑穀類は、九世紀後半以後に増加するようである。このころ、口分田の班田に基づく水田経営が行き詰まりをみせてきたことや人口が増加してきたために米が不足し、人々は畠作物への依存を高めていったのである。畠は適宜、集落周辺の荒れ地を開墾して設けることができたうえ、水田と異なり課税もされなかつたため「森田悌一九八六」、そこからの収穫物は人々の生活維持のための食料として重要な役割を果たしたからである。そしてより一層の収穫量を確保するために、冬作物の麦が求められたものであろう。その際、イネ・アワ・キビと同様に粒食に向くオオムギが選択されたものと考えられる。なお、九世紀前半における国による麦作の命令「吉田美夫一九九八」は、備荒を目的とする大規模な作付に対してのものであり、一般集落におけるオオムギを中心とした雑穀生産の盛行の動機とは切り離して理解しておきたい。

冬作の普及は、古代における米中心の主食を転換させるきっかけとなつたと思われる。櫛原功一氏は、一世紀後半以後に主食が米から麦などの雑穀中心となつたことで、調理方法が古代のような甕と甌で蒸す方法から鍋で煮炊きする方法へと変化したのではないかと考えた「櫛原一九九八」。ひたちなか市では、「サンゴクメシ」と呼称される、コメ・ムギ・キビ・アワなどを一緒に煮てしもう食べ方が広く民俗例に認められている「館野みどり一九七五」。こうした郷土の食のあり方は、もしかすると九世紀後半の変化が起点であつた可能性があろう。

4 おわりに

富士ノ上II遺跡の炭化種実の内容は、稻作主体と考えられた八世紀後半の食糧生産の動向に再考を促す結果となつたが、市内においては古墳時代前期と奈良時代の資料の量がまだ不十分なため、今後その時代の同定数を増やすことが必要である。また、九世紀後半に食糧生産上の大きな画期が認められたが、その変化を集落構造の変化と関係づけることも、その画期の意味を理解するうえで今後の課題といえる。炭化種実は当時の食料を知ることができる貴重な資料であり、今後の調査によってさらに同定資料が増え、より具体的な古代の食生活が描けるようになることを期待したい。



写真2
スモモの木と
スモモの実

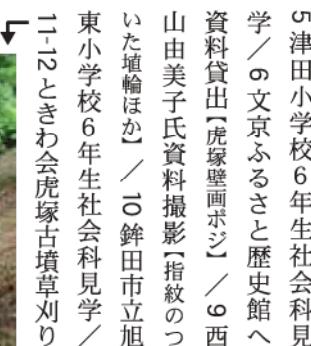
主な参考文献 北川浩之一九九五「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」「講座文明と環境六 歴史と気候」/ 櫛原功一一九九八「炭化種実から探る食生活—古代・中世を中心に—」「遺跡・遺物から何を読み取るか(II)」二〇〇三「古代常陸の食」「婆良岐考古」第二五号/館野みどり一九七五「食物と食制」「勝田市史民俗編」/パリノ・サーヴェイ株式会社二〇〇八「富士ノ上II遺跡自然科学分析報告」(未報告)/森田悌一九八六「畠と園地」「日本古代の耕地と農民」/吉田美夫一九八八「日本における小麦の栽培史—起源から中世までについて—」「全集日本の食文化第三巻米・麦・雑穀・豆」雄山閣出版/ひたちなか市教育委員会・(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社二〇〇八「富士ノ上II遺跡」

文一の々 前期 埋セント日 2009

- 4月
- 4・5 史跡保存対策委員会(虎塚古墳点検等) / 8 ひたちなか市職員新人研修会 / 9 水戸市教育委員会視察【十五郎穴】 / 15 西山由美子氏(茨城県自然博物館)資料調査【馬渡埴輪製作遺跡埴輪】
 - 13 三[反田小学校]6年生社会科見学 / 15 遺跡めぐり「埼玉県えきたま古墳群探訪」開催 / 佐野小学校6年生社会科見学



- 13 三[反田小学校]6年生社会科見学 / 15 第5回企画展「[三]反田人骨クリーニング2」開始 / 19 茨城放送②「ひたちなか市出土の大刀」 / 20 堀口小学校3年生社会科見学 / 22・23 大塚宣明氏(明治大学大学院)資料閲覧・撮影【後野・武田西塙遺跡旧石器】 / 23・24 三[反田小学校]小野瀬天人君等土器鑑定依頼【三反田遺跡・三[反田]鰐塚貝塚】 → 放送①「縄文時代のウンチ」 / 29 新人物往来社取材・撮影【虎塚ほか】
- 5津田小学校6年生社会科見学 / 6 文京ふるなと歴史館へ資料貸出【虎塚壁画ボジ】 / 9 西山由美子氏資料撮影【指紋のついた埴輪ほか】 / 10 錐田市立旭東小学校6年生社会科見学 / 11・12 ときわ会虎塚古墳草刈り



- 16 市民憲章文化部会 / 茨城放送③「縄文人の虫歯」 / 17 外野小学校3年生社会科見学 / 19 阿字ヶ浦小学校6年生社会科見学 / 20 茨城キリスト教大學博物館実習施設見学 / 23 東海村立照沼小学校5・6年生見学・勾玉作り体験
- 5津田小学校6年生社会科見学 / 6 文京ふるなと歴史館へ資料貸出【虎塚壁画ボジ】 / 9 西山由美子氏資料撮影【指紋のついた埴輪ほか】 / 10 錐田市立旭東小学校6年生社会科見学 / 11・12 ときわ会虎塚古墳草刈り



虎塚古墳周辺に咲くチゴユリ (2007.5.2)



(稻田健一)



3 チゴユリ

第三回田はチゴユリ(稚児百合)です。田半せかひん田。初め頃に、やや緑がかつた白い花が咲きました。花はや下向きに咲くため、花を見るためには、下からのぞき込む恰好になります。その姿は、まるで「稚児行列」の幼子が照れて顔を隠しているように見え、のぞき込むのがいいですね。

花のねむにせ、黒い実をつけます。

7月

- 2-4 新堤遺跡試掘調査／2茨城県自然博物館企画展「姿なき化石」／資料貸出【指紋が残る埴輪ほか】／3高野小学校6年生社会科見学／5「ノンケース・ミコーシアム12「ひたちなか市出土の大刀」終了／7下館市女性学級見学／10ふるわと懐古館資料展示【佐藤次男考古学資料】／18「ソンケース・ミコーシアム13「佐藤次男考古学資料Ⅱ」開始／20ふるわと考古学①「樂しへ考古学」（講師・さかいひるじ氏）／葛飾区生涯学習課学び交流事業見学／21茨城放送④「足元の考古学—草鞋」／23樋口碧氏（茨城大学）資料閲覧【三ツ塚古墳鉄鑑】／23-27三反田新堀遺跡試掘調査／25ふるわと考古学②「土器の考古学」（講師・佐々木義則）／26ふるわと考古学③「土器の考古学」（講師・綿引逸雄氏）／28ひたちなか市教育委員会指導室研修会／30片平雅俊氏（日立市博物館資料閲覧【磯崎古墳馬具】

- 8月
22ふるわと考古学⑥「土器の考古学」（講師・綿引逸雄氏）
2 大洗町歴史を楽しむ会見学
／3ひたちなか市教育研究会
- 田市立峰山中学校2年生職場体験学習／9ふるわと考古学④「骨の考古学」（講師・小宮孟氏）／11北野信彦氏・森井順之氏（東京国立文化財研究所）資料保存処理【武田西塙遺跡わらじ】／12長谷川聰氏（茨城県立歴史館）資料撮影【虎塚古墳刀】／16ふるわと考古学⑤「石の考古学—」（講師・小菅野夫氏）
- 9月
5川口武彦氏資料閲覧・撮影【原の寺窯瓦跡文字瓦】／木本拳周氏資料閲覧・撮影【原の寺瓦窯跡軒瓦】／11常総市民大学見学／15茨城放送⑥「紡錘車について」／16川信隆氏寄贈資料受入【道理山遺跡採集石器】／15-17大島中学校2年生職場体験学習／17なす風土記の丘資料館企画展「那須の横穴墓」／資料貸出【十五郎横穴大刀ほか】／26ふるわと考古学⑦「布の考古学」（講師・青木光恵氏）
- 16第5回企画展「三反田人骨クリーニング2」終了／18田嶋毅氏寄贈資料受入【大平A遺跡採集土器】／茨城放送⑤「黒曜石のナイフ」／18-23博物館実習（茨城キリスト教大学・筑波学院大学）

入館者状況 (2009.4.1~2009.9.30)

月	開館日数	個人		団体		計	
		(人)	(団体)	(人)	(人)	(人)	(人)
4月	26	232	3	(0)	58	(0)	290
5月	27	436	6	(3)	408	(323)	844
6月	25	204	8	(5)	434	(354)	638
7月	27	236	7	(1)	409	(154)	645
8月	26	404	13	(2)	271	(4)	675
9月	26	211	6	(3)	113	(12)	324
計	157	1723	43	(14)	1693	(847)	3416

（）内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社が開催する事業は『ひたちなか市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。
<http://business2.plala.or.jp/h-bunspo/>

- ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社が開催する事業は『ひたちなか市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。
<http://business2.plala.or.jp/h-bunspo/>
- その日は、「ふるわと考古学」の土器作りの補講が予定されていた。これに参加するナカオカさん姉妹のご両親に、補講後の撮影について急遽に承諾をいただきました。二歳違いの姉妹は仲が良すぎるのだろう、すぐ喧嘩になってしまふ。土器作りが終わりかけた頃、これが始まった。「お世話になります」と迎えに来たご両親を、「いま闘つています」と案内する。一人のシャツには、茶色い手形がいくつも付いてしまっていた。「エプロンを着けなさい」と言つたでしよう」というお母さんの迫力に、姉妹はうな垂れる。逆に、撮影にはエプロンを着けることになつた。

糞石を白い皿に載せる

ことまではイメージして

あつた。モデルが純白の

エプロンで登場した時、

そこに絶妙な組合せが

生まれた。こんなことな

ら、先割れスプーンも用

意しておくのだつた。

編集後記の 笹の埴輪

第一九号から表紙に子どもたちの姿を入れるようにした。写真はこつそり撮る。そうしないと、カメラに気付いて手にVサインを作り出すからだ。しかし、この方法では主題にも構図にもすぐに限界がやつてきた。モデルを依頼して、準備した設定のもとに撮影を試みてみよう。

その日は、「ふるわと考古学」の土器作りの補講が予定されていた。これに参加するナカオカさん姉妹のご両親に、補講後の撮影について急遽に承諾をいただきました。二歳違いの姉妹は仲が良すぎるのだろう、すぐ喧嘩になてしまふ。土器作りが終わ

りかけた頃、これが始まった。「お世話になります」と迎えに来たご両親を、「いま闘つています」と案内する。一人のシャツには、茶色い手形がいくつも付いてしまっていた。「エプロンを着けなさい」と言つたでしよう」というお母さんの迫力に、姉妹はうな垂れる。逆に、撮影にはエプロンを着けることになつた。

